

(『武漢日記』13~15　　これで終わりです)

「封城」(ロックダウン)下の武漢の暮らし

- 方方女史の『武漢日記』(13)

田畑光永(ジャーナリスト)

3月20日

快晴続き。気温は昼に26度まで上がった。でも暖房はまだ止めてない。部屋の中と外の温度が同じくらいになった。窓を開けて空気を通した時、中庭に数羽のカササギが飛来していた。門前の楠と白木蓮の上を飛び回っている。1羽はわが家の入口まで来て石臼の水を飲んでいいる。みんなその姿を見て大喜びだ。どんないいことがあるのだろうと楽しみにしている。(訳注:カササギは吉事を運ぶと言われる)

病気については特に話すこともなさそう。依然としてゼロ。このゼロが一直線に続きますように。そして14日後、われわれは門を出て行ける。ただ、ネット上には気になる話がいくつか。心配ごとは広く伝わる。1つは同済病院に感染確認患者が20何人も出たが新聞には載らなかった、という話。私はこの情報を2人の医師に直接ぶつけてみた。1人が言うには、それは誤解だ。現在、退院する人が多く、残った患者はいくつかの指定病院に移している。だから新患者ではなく、転院だ。

別の医師の言い方は思い切ったものだった。きびしい制度だから、本当かもしれないし、あるいはもう真面目に届けてないかもしれない。

また別のビラによる噂話も飛び交っている。1人の病人が退院した後、検査で陽性となった。ところがなかなか入院できないというのだ。これも人々を不安にさせている。そこでまた2人の医師に聞いた。1人は陽性に返ることはあるが、非常に少ない、と言う。もう1人も同じようなことを言ってから、もう少し具体的に教えてくれた。それによると、新型コロナウイルスを治療する指定病院は調整が行われている。その病人は行くところを間違えて、行ったところが指定病院ではなかったのだ。しかし、よく知っている顔のきく指導者に相談し、結局、その病院に受け入れてもらったようだ。

友人の医師たちは2点を強調した。陽性に転じる患者は確かにいるが、非常に少ない。そしてなんの症状もなく、感染もさせない人もいる。もし具合が悪くなった人がいれば、病人はすべて病院が追跡しているから、指定病院に行けば、そこでは受け入れないという問題は発生しない。私は医師と病人の言い分の違いを確かめたりしなかったのだ、言われたことだけを書いておく。

しかし、武漢人は、感染したかしなかったかにかかわらず、心理状態がこのところ非常に脆くなっている。神経も緊張している。指定病院が調整された件はもっと目に付く方法で告知してもらいたい。どんな調整も知らせはすぐに更新してほしい。そして病人に対しては、体に不調を覚えたら、まずこの病院が新型コロナウイルスを受け入れ、どこが受け入れないかを確認して、間違った病院へ行って、無駄骨を折らないように徹底してもらいたい。夜中に何時間も外で病院を探しまわるなんてどれほど辛いことか。

中心病院からまた不幸が伝わってきた。病院倫理委員会委員の劉励女史が新型コロナウイルスで今日午後、不幸にも亡くなった。中心病院の人で亡くなったのはこれで5人目。病院のお偉いさんがたはよくじっとしていられるものだ。

昨日はとて多くの人々が某「高校生」に返信してくれた。それは今日まで続いた。それから今日はもう1件、「数名の高校生から1人の高校生への返信」というのもあったが、最初、私は気に留めなかった。どこかのサイトで遊んでいるのかと思ったのだ。ところが友人の1人に本当の高校生の返信だと言われて、驚いて、探し出して読んでみた。そして、高校生と「高校生」はずいぶん違うことを知った。文字が違うだけでなく、はっきり境界線がある。文中にある一節を大変、面白いと思ったので、どうしてもここで引用したい。

「われわれがまあ言いたいことと言えば、非常に多くの場合、問題はわれわれが過度に暗黒に注目することではなく、われわれがまぎれもなく過度に光明を熱愛しているところにある。—そして強い光でわれわれの視力を傷つけているのだ」。子供たちはもともとわれわれが想像するほどには弱くはない。彼らはしっかりと独立した思考能力を持っている。その上、豊かな観察力を持っているから、多くの問題で大人たちよりももっと遠くまで考えている。

昨日はもともと昔の文学論争について書くつもりで、一部分を書いたところで、『察網』の文章を目にした。そこで話題を変えることにし、すぐ弁護士に証書を取ってもらうことにした。今日の昼、たくさんの情報が送られてきた。あの『察網』に載った齊建華の文章が削除された、と。へー、自分で違法と分かっていたんだ。削除したということは自ら誤りを認めたわけだから、こちらも許すかどうか思案してみよ

う。

午後、ある人がこう言った。上海のある極左が不服で泣いたり騒いだりしながら、告訴はできない、告訴はできないと言っているような。この話は面白い。それじゃ、削除しなさんな！

もともと今日は昨日の文学の話題の続きで、当時と今の話をするつもりだった。ところが突然、また友人が文章を転電してきたために、再び中断。まあ文学のいいところは話題としてクールなことで、朝、語ろうと、夜、語ろうと別にどうということはない。

北京大学の張頤武教授（訳注1）がみずから出て来た。大物だ！私を包囲攻撃するあの連中の後ろ盾か？あるいは先頭のお兄さんか？軽視することはできない。聞くところでは張教授はウエイボー（ツイッターの名前）で文章を出すそうだが、私はそれを直接読めないの、友人に送ってもらった。その一段をここに採録して、とりあえずの記録としておこう。

張教授曰く。「もっぱら疫病のことを日記に書いている作家がいるが、今、その文章がいたるところで批判され、疑問を投げかけられている。彼らがいかに陰惨な目に遭っているか、いか縛られているか、匿名の高校生がいかに愚昧であるか等々、なぜ人々はこうした文章を信用しないか。率直に言って、病気の蔓延がひどい時に日記に描写する手法が、ルポルターージュのような言葉だからである。葬儀社の床におちていたスマホの写真、これは医師の友人が彼女に提供したものとされるが、そんなことで広く注目を集め、それが伝播し、日記が目を引くことになったのである。

大勢がこの件に疑問を持ち、この写真が実在するかどうか質しても、一貫して正面から向き合わず、あれやこれやの果てに、彼女は自分が迫害されていると言い募るのである。しかし、作家にとって最も大事なことは最低限、真実を求める心である。人間としての最低限の条件である。欺瞞を組み立てて、それを正直に信ずる読者を彼女は欺いてはいけぬ。さらに重大な時期に、重大な事柄で偽造することは絶対に容認されない。良心を持たないことは、一人の作家として一生の、さらに永遠の恥辱である」

張教授の文字を見ていて、彼が私の日記を読んでいないことが分かった。誰か読んだ人が要約を作ったのであろう。それも自分の口調で作った要約を。「匿名の高校生がいかに愚昧であるか」などは、私が言っていない言葉であることは明らかである。さらに張教授は「なぜ人々はこうした文章を信用しないか」と言うが、張教授の「人々」は何人いるのだろうか？教授の周りにいる人たちだけではないのだろうか？張教授は私を信頼する人間が何人いるか見たことはないのでは？張教授の方法で論断するならば、張教授を信頼する人間を私は1人も見たことはありません、文壇と言わず、学界と言わず。

さらに「欺瞞を組み立てて、それを正直に信ずる読者を彼女は欺く」と言い切っているが、張教授も「組み立て」はなかなかお盛んではないですか？それも張教授の「組み立て」はたいそうなものだ。周小平（訳注2）がいかに好青年か称賛するときに、教授はまことに熱烈な言葉を使い、まるで周小平は張教授以上に北京大学の教授に適しているかのようでした。

実のところ、張教授はご自分のせこい根性で他人を推し量るのがお好きなようで、それでご損もなさったはずですよ。いつでしたか張教授はある著名作家の小説を推測で「模倣」と決めつけて、こてんこてんにやっつけられたではなかったですか？

写真のことは、私はすでに別の日にはっきりと書きました。残念ながら張教授は私が何を書いたかご存じないようですが、張教授はぜひ武漢にいらして、当時の真実の状況をご理解いただきたい。当時、毎日何人が死亡したか。遺体は病院から火葬場へどのような手順で運ばれたか。亡くなった方の遺品はどこへ行ったか。病院と火葬場はどのような状況下にあったか。リチウム電池は焼却できず、消毒も間に合わなかった時はどう処理するか。さらに全国のいくつの火葬場から応援が武漢に来たか？などなど。

こういう話はここまでにします。張教授および皆さんが理解したければ理解していただきたいし、理解したくないのであれば、どうぞご随意に。写真はいつか皆さんもみることが出来ると思います。私がお見せするのではなく、持ち主がお見せするでしょう。私は本心から張教授が武漢に来て実地調査をされるよう提案します。当然のことですが、一言つけ加えれば、これらはすべて早期の段階で起こったことです。後期のことではありません。張教授が真実の状況を理解された上で、はっきりした結論を出されれば、きっと北京大学のレベルに達したものとなるでしょう。そういうふうにご学生を教えれば、きっと父兄も安心するでしょう。

今日はここまでにする。一言、繰り返しておきたい。極左は国と民の双方に災いをもたらす存在だ。改革開放がもしも彼らの手で破壊されるようなことになれば、それはわれわれ近代人の恥辱だ。さあ来い、お前たちの手の内すべてをさらけ出せ。お前たちの背後の大物を呼んでこい。私が怖がるかどうか、見せてやる！（続）

訳注1：北京大学中文系教授。同時に「微博」（ウェイボー）で盛んに時事問題について発信している。
訳注2：1981年四川生まれ。著名ブロガー、作家。2014年10月に開かれた文芸工作座談会で、習近平から「方向の正しい（中国語は『正能量』）の作品をたくさん創って欲しい」と声をかけられたことで有名に。

「封城」（ロックダウン）下の武漢の暮らし

- 方方女史の『武漢日記』（14）

田畑光永（ジャーナリスト）

3月21日

封城59日目、なんとまあ長いこと。昨日のあの大きかった太陽が今日は突然暗くなった。午後にはいくらか雨も落ちてきた。この時期、中庭の樹木や花に雨はとっても必要だ。2,3日前、武漢大学の桜は満開だったのに、樹の下はがらんと無人。たぶん記者が撮った写真が同窓生の間をぐるぐる回っている。人のいない桜の道は文句なしの美しさ。

真っ暗になった夕方、文聯の入り口に速達を取りに行った。春雨が降っていた。傘は持たなかったが、とても気分がよかった。その帰り、わが棟の入り口まで来たところで急に激しく降り出した。一足遅ければずぶぬれだった。幸運。

病気の方は見たところ落ち着いている。しかし、人心は安定と言うわけにはいかない。みんな新型肺炎患者が再び増えるのでは、と、びくびくしている。誰かがゼロの記録を破らないために、故意に知らせないのではと心配している。友人の医師たちに聞けば、彼らの答えはいつもきっぱりしているが、ネット上では相変わらず大勢が心配している。このウイルスは奇妙で狡猾、分からないこと、不確定なことがたくさんある。だからみんな恐れている。とくに武漢人は早い段階でのあの酷い悲惨さを直接見ているから、心の深いところに恐怖が潜伏している。ちょっと熱でも出れば、みんな病院に駆け込む。おかげでもともと新型肺炎でないのに、病院でかかったりする人もいれば、医療システムを崩壊に近づけて、より多くの人を死なせたりもする。

だから現在、病気は平穏で恐れなくていい。病院はたつぷり治療経験を積んだから、感染だろうとぶり返しだろうと、緊張する必要なし。治療するだけのことだ。普段からわれわれは金剛不壊の身体ではないのだから、よく病気にかかる。だから普段どおり治療を受ければいいのだ。せいぜいちょっと時間がかかるというだけのことだ。冬から春にかけてはもともとインフルエンザがはやる。だけどみんなちゃんと生きているではないか。

上海の張文宏医師によれば、この病気の致死率は1%以下。だったら怖がる必要はない。死にさえしなければかかっても怖くない。仮設病院の患者たちも病院の中で踊ったり歌ったりしていただではないか。退院すれば大喜び。別に他の病気ととくに変わったところはない。

話を戻す。私にはゼロを追及する気持ちが分からない。ゼロと1の間にどれほどの差があるのか？私にすれば、政府だろうと民間だろうと、こんな小さな差を大騒ぎする必要はない。伝染病はいつだって存在する。みんな警戒しているが、かかれば治療するところがある。それでいい。まさか、ゼロ人なら、われわれは仕事ができるが、1人いたとなると仕事に影響するだろうか？その1人を病院に送り込んで隔離すれば、それでいいのでは？何が何でもゼロの完璧を追及しなければならないのだろうか。そんな完璧さは時によつては極めて非現実的だ。

新型肺炎の予防については、私は上海の張文宏医師の判断を信頼する。彼はこの病気は本当に予防できると言う。それには有効な個人の防護、社会的距離の保持とその後の手洗い、さらにマスク、この3つが必要だ、と。張先生は「これまでのところ、この3点をきちんと守って、それでも感染した人は見たことがない。その可能性は極めて低い」と仰る。私もこの見方には賛成だ。

上海人にすれば、湖北にはなんでも差し上げるけれど、張文宏医師だけはだめ、というところか。上海人が何故ここまで張先生を信頼するかといえば、彼の話はすべて実証済みのことなのだ。また日本の蔓延抑制もすこぶるうまくいっているようだ。それには日本人の衛生面の習慣が非常に良いことが相当程度ものをいっているようだが、確かに世界を歩いてみて、日本ほど清潔なところはない。だから日本人は長寿なのだ。いろいろ言ったが、衛生に気を付けることが多くの病気を防ぐのだ。

新型肺炎が発生して以来、「愛」とか「善」とかが、今やそれほど空疎なものでなくなった。人々はは

つきりと本当の善、本当の愛とはなにかを見てとった。ただ惜しむらくはただ喚くだけの人間というものなのだ。そういう人間はいざとなるとどこかへいなくなってしまう。われわれはそういう幻の概念に慣れてしまっている。情熱的に愛を伝え、善を示しても、いざ具体化となると熱情どころかほんのわずかの温度さえ感じ取れないのだ。ここ数日、映像を通じて千里を巡ってやっと帰国した同胞に向かって辱めと罵声を浴びせる人たちを見た。あるいはまた外国へ働きに出ていた湖北人に対して、はげしく反感を示すのを見て、なんとも不思議な感じを受けた。なぜ国を愛する熱い気持ちでこの人たちを愛せないのか？

肺炎が武漢で発生したばかりの時、武漢人の医療用物資は極度に欠乏していた。そこで海外にいた同胞たちは全力で所在国の商店の棚が空になるほど駆け回った。武漢が難関を乗り切るのを助けるために。ところが次に彼らが家に帰ろうとして困難にぶつかった時、あんなに多くの人が出てきて罵った。一瞬で顔が変わった。人のさかの悪さを見せつけた。まだある。湖北人は病気が蔓延しないよう数々の困難を背負わされた。自分を押しえつけて50日余りも家にこもった。そして彼らが再び自分の働き場所に戻ろうとした時、さまざまな邪魔をした。われわれにはあの氣宇壮大なスロークーガンがあり、あんなに沢山の文献があったのに、目の前のこととなると、そんなスロークーガンや文献は空気みたいなものとなった。政府は同胞の帰国と湖北人が省を出て働きに行くのに大きな支持を与えた。にもかかわらず民間の一部の人間がそれに従わないのは、私には不思議でならない。

ほかにも細かいが、記録しておいた方がいいことがある。諸外国は国民にお金を配っている！このニュースが伝わるとネット上は狂ったような大騒ぎだ。お金を配る威力はたいしたもの、掛け値なしにみんな羨ましい。そして誰も感ずる疑問、中国は配る？配らない？湖北は配る、配らない？今日、1つの提案を見た。湖北ではなにがしか金券を配るべきだ。蔓延がおさまれば民衆は市場でそれを使って買い物をする。市場の販売が増え、市場の活気が続く。そして元気の回復が早まる、というのだ。コメントを見ると、この提案に賛成する人が多い。

武漢では、聞くところでは例えば弱い立場の人たちに一定の対策があるという。「扶貧弁」(注：貧しい人を援助する公的機関。國務院扶貧領導小組弁公室)からの情報で、「肺炎蔓延が貧困家庭の収入に与える影響を最大限に減らすため、全市の低保家庭(注：最低生活保障家庭)、低収入家庭のうちの都市、農村における臨時工、肺炎蔓延で出稼ぎに出られず無収入となった者に、都市と農村の最低保障基準(都市780元/月)、農村635元/月)(注：約12,500円、約10,000円)の4倍を一時的臨時的に救助する」との由。聞こえてくる外国の話と比べると、ずいぶん差が大きい。が、ないよりはましだ。べつに損する人間がいるわけでもなし。

肺炎がここまで落ち着いて、病院もぼつぼつ外来診療を再開した。ただし元通りかどうかは分からない。実際のところ、これは焦眉の急なのだ。平時だって病院はいつも患者でいっぱいだった。それがこの2か月というもの、急性も慢性もすべての病人は新型肺炎のために自分の問題は自分で克服しなければならなかった。つまり待っていたのだ。

しかし、待つと言うことは自分の身体を傷めることが前提だ。たとえば化学療法が必要な癌患者が化学療法を受けられなくなったらどうなるか？手術が必要な患者の手術が延びたら、手術も受けられなくなってしまうのか？ということだ。

友人が1通の手紙を転送してきた。出し出し人は自分の妹のことを書いている。その妹さんは以前は毎日、太極拳に出かけていた。家に50日あまりこもったところで、脳卒中を突発した。110番したが、どこの病院も受け入れてくれない。やっとある病院に運び込んだが、そこではまず新型肺炎かどうかの検査を受けた。その結果を待って、新型肺炎でないことが分かったが、その時はすでに手術の時期を過ぎていた。そして1週間後に亡くなった。差出人は言う。「顛末を話して、心中の憤懣を聞いてもらいたいこともあるが、もっと大事なのは武漢の関係方面の人に、正常な医療秩序を大急ぎで回復するよう訴えたい。正常な公共交通秩序も回復して、予防と秩序を同時に重視してほしい。さもないと死ななくてもいい人が大勢死ぬ！弟の嫁の母親は胆管癌の痛みで食事もできなかったが、受け入れてくれる病院がなかった。110番、120番はいくら電話しても誰も出ない。正月の2日に痛がりながら死んでいった。「コロナの全市蔓延はほんとうに憎らしい。武漢の衛生健康委員会も蔓延について不透明、不開示。死ななくていい人をどれほど殺したか。封城の前のあの何もしなかった指導者たちは心中まったく無策だった。封城からもう2か月になるが、大勢の高齢慢性病患者、癌患者、急性患者に対応する措置は全くない。なんと恐ろしいことか！！！」以上は感嘆符を含めてすべて原文である。

身辺の人間がつぎつぎ世を去る。間違いなく恐怖の連続だ。医を求めても門なし。これは急性、慢性の患者が今、直面する尋常でない現実である。この問題を医師の友人にぶつけた。「普通の病人が診察を受

けに来たら、まず血液検査をして新型肺炎かどうかを見るの？病気を診るのはその後ってわけ？」。

友人の医師の答え。「新型肺炎以外の患者を診察する場合、安全のためわれわれの病院は2つの緩衝区を設けている。新型肺炎の可能性がある場合は隔離病棟に入れる。肺炎でないと分かれば緩衝病棟に入れる。患者は全員に、核酸、胸部CT、および抗体を調べる。家族の付き添いが必要ならその家族の胸部CTと抗体を調べる。新型肺炎でないと確認してから付き添いができる。心筋梗塞、脳卒中の患者に対しては、われわれ神経科の医師と心臓血管の医師は直接救急処置を行い、新型肺炎の検査結果を待つことはしない」。惜しいかな、手紙を書いた友人の妹さんは今まで待つことはできなかった。

医療人員自身にも心配はある。現在、蔓延阻止はまだ完全に安定したとは言えないから、病人が感染者かどうかには心の中では恐れがある。あんなに大勢の医療人員が倒れたのだから、彼らにも傷と恐れがある。友人の医師は言う。「新型肺炎の患者を排除しなければ、入院後、ほかの患者に感染させる。われわれの責任は大きい。武漢封城50余日の成果は一朝にして崩れる」。この問題は相当に深刻だ。

友人の医師は患者との関係がまた緊張しそうだと考えている。なぜか？検査が増えたために馬鹿にならないお金がかかるのだ。彼に言わせると、なぜ新型コロナウイルスの治療になぜみんなが満足したかと言えば、政府が費用をもったからだ。貧困家庭にとって1000元は大きな消費だ。何項目も検査をすれば1000元近くかかる。とって、すぐに入院できるわけでもない。こうして怒りは第一線の緊急診療科の医師にぶつけられる。今、患者は応急診療を受ければ、外来ということになる。武漢市では入院だけが保険で支払われることになっていて、応急診療の分は患者自身の負担だ。もし、政府が払ってくれれば、われわれが罵られるのは大きく減る。患者に払わせるから医者が怒鳴られる。病院の人手不足と言う問題も明らかに存在する。「疾病の初期に医療人員が感染することが非常に多い。そして大部分は完全に回復する前に家に帰って在宅療養だ」。庶民の苦勞と医師の負担が目の前に広がっている。現在も状況の厳しさは新型コロナウイルスの猖獗時期とちっとも変わらない。目に見えている問題も解決しようとすればとてつもなく難しい。やはり専門家が政府に建言献策して、ともに問題解決の方式を探さなければならない。たとえばどんな病気でも新型肺炎に関係ある検査ならすべて無料というのはどうだろうか？

「封城」(ロックダウン)下の武漢の暮らし

- 方方女史の『武漢日記』(15)

田畑光永(ジャーナリスト)

3月24日

封城62日目。私のこの記録も第60回、最終回としていだろう。

全く偶然だが、今日、通告を見た。武漢以外の地区はすべて封鎖が解かれ、緑の健康カードで自由に行動できることになった。そして武漢市は4月8日に封鎖解除される。間もなく武漢も澆刺たる生気を取り戻すのだ。私は開城まで記録して終わりにする、と言ったが、その後、分かったことは、開城は封城のような緊急行動とちがって、ゆっくりとした過程なのだ。一部分、一区域と解除されてゆく。私は肺炎の蔓延がゆっくりとなれば、みんな仕事に戻り、その時が終わりだと思っていた。友人たちもこの考え方で正しいと言っていた。

ところが結果は第54回を過ぎ、60回まで延ばして、ようやく開城の通告に接した。それで予想外ではあるが、これを最後の回としよう。開城通告も記念としては十分価値があるはずだ。私の記録は元旦(春節)に始まり、開城通告下達の日で終わる。完璧だ。私の長兄は3月14日に感染確認人数と毎日の減少数から計算して、4月8日に武漢は開封されるという回答を出した。思いもかけず、ご名答だった。長兄は自作の粗末な計算式で武漢の開放日をあてたと大喜びである。

今日、昼の空は明るかったのに、午後、突然暗くなり、雨も降りだした。お手伝いさんが、明日には武漢に戻れると言ってきた。胸が軽くなった。彼女は料理上手で、以前はよく同僚たちが我が家へやって来て食べていったものだ。市内が自由に歩けるようになったら、彼らはまた食事時をねらって我が家へ来ることだろう。私の苦難の日もまもなく終わる。

広西(チワン族自治区)の梁看護士について、私は今日、はっきり説明しておきたい。昨夜、日記を書いている時、医師の友人から知らせが届いた。この知らせは医師の間を回っているそうだが、1枚の紙の上の部分に段落を分けてこう書かれていた。「広西のあの昏倒した看護士は、今夜、わが病院で亡くなった。彼女はまだ28歳、母親がいる。もはや帰ってこない。彼女は掛け値なしに武漢に命を捧げた」。医師の友人も無念の気持ちにとらわれているが、私もつらい。この前、女性看護士が救急患者になったことは多く

のメディアが報道した。この知らせが、間違いないかどうか、紙片を協和病院の医師に回して確認してもらった。

彼からの返事は「脳死による。きわめて不幸」だった。

私の医学知識は乏しい。けれど、これは私の質問に対する確定した回答だ。すぐに感じたのは梁看護師をこのまま無言のうちに見送ってはいけないということだ。このことは記録されなければならない。人々に永遠に記憶されなければならない。そこで私は昨日の日記に書いた。

そして今日はこのことについて多くの人から質問が来た。ネットではデマではないかと言う声もあった。午後、私はもう一度、2人の医師に確認した。2人からはそれぞれ専門的な説明があった。そして事後の態度もほぼ同じ、申し訳ない、というに尽きる。私もそうだ。だからここですべての読者、そして梁看護師のご家族に心からのお詫びを言いたい。梁看護師の生命はわれわれ全員の気がかりであったし、彼女はまさしく「武漢に命を捧げた」人となった。

昨日、友人が1篇の文章を送ってきた。誰かが私に「武漢、市民聯合署名(訳注)に参加して、アメリカの手先でないことを証明しろ」とわめいているのだった。一目で幼稚かつ低俗、笑ってしまう程度の物だ。筆者の名前は言わないことにしよう。博士だそうだ。なぜ私の文章を読んだのかは全く分からない。ちょっとばかり好奇心が刺激されるのは、この人物が北京大学卒業であるかどうか、あるいは本科で学んだか否か、である。本科の卒業生ならここまで品位が低くはないだろうと思うのだ。ところで、その聯署する文章とやらをまだ見ていないので、聞いたところ、役所は署名者と話をし、その行動はやめさせられたということだ。友人は「証明するチャンスを失ったね」と笑っていた。結局、今に至るも何のことやら分からずじまいだ。

非常に興味深いのは中米両国の政治家が互いに相手を非難、攻撃している時に、両国の医師たちはどのように病人を救うか、どの薬物が確実に死亡率を下げるのに有効か、どの治療法がより良いかを、一緒に話し合っていたことだ。さらにどのように防護するか、どのように隔離するか、といったことを。武漢での蔓延がひどかった当時、在米華人は商店の棚にあるマスクを買い占め、祖国に送ってくれた。そしてこの時、アメリカの医師たちはマスクその他の防疫物資の欠乏に悩まされた。ある友人の華人が言うには、当時は本当に彼らに申し訳ないと思ったそうだ。しかし、医師たちはこの問題もどう解決すべきか討論の場で話し合ったという。

こういう医師たちは政治的偏見を持たず、国対国という意識もなく、互いに経験を学び合い、手がかりを提供し合った。これこそ医師の仁心大愛、人類に対する愛、人に対する愛だ。職業が異なれば、ものを見る角度、何かをする仕方は全く異なる。私は医師たちの職業精神と心の持ち方が本当にうれしい。

今日が最後的一篇ではあるが、べつに今後はなにも書かないというわけではない。私のウエイボー(ショートメール)はそのまま私のサイトであり、以前と同じように私はそこに私の考えを書く。責任を追及することを、私は放棄しない。多くの人がお役所の責任は追及できない。できる望みはない、と言ってきた。役所の責任を最後まで追求できるかどうか、それは私にも分からない。しかし、役所がどう思おうと、2か月余りも家に閉じ込められた武漢市民として、自分の目で武漢の悲惨な日々を見続けた証人として、罪もなく死んでいった人たちに公平正義の光をあてることはわれわれの責任である。誰の過ちであり、誰の責任であるか、誰がそれを自ら引き受けるべきか。もしもわれわれがこの一連の日々を忘れ去り、もしもある日、われわれがいつもそれに負けるあの絶望さえも忘れてしまったとなったら、そうなったら、私は言いたい。武漢人よ、お前たちが背負ったのは災難だけではない。お前たちは、その上に恥辱を背負わなければならないのだ。忘却という恥辱を！もしも誰かがこの一言を軽く消してしまおうと思っても、それは絶対に不可能だ。私は一字ずつ書いた。歴史の恥辱の柱に書きつけるために。

ここで特別に感謝したい、連日、私を包圍攻撃してくれた極左分子たちに。彼らの激励がなかったら、私のような怠け者はとっくに書くのをやめてしまったか、3日漁をして2日網を干すか(休み休み働く)で、これほどの量は書けなかったろう。そして筆任せに書いたこの記録をなんと多くの人が見てくれたことか？さらに私を喜ばせてくれたのは、彼らが私を攻撃するにあたって、手の内をさらけ出してくれたことだ。彼らの陣営が全員集合でそれぞれが文章を書いた。そして読者が見たものは何だったか？混乱した論理、畸形な思想、ねじ曲がった視点、低劣な文字および下劣な人品。要するに彼らは天下に自らの短所をさらけ出し、毎日、自らの変態的価値観を展示した。人々はこれで悟った、え？極左のネット名士といってもこんな程度だったのだ！と。

その通り。それが彼らの本当の顔なのだ。私に手紙を書いたあの高校生の文章と思想のレベルがおおよそ彼らの最高水準だ。だいが以前に誰かが極左について非常に綿密にまとめてくれたことがあり、まだネ

ットで探せるかもしれないが、ここ数年、極左のレベルの低劣なことといったら、新型コロナ・ウイルス同様の様だ。そして少しずつわれわれの社会に蔓延し、とくに彼らは役人たちの周りで活動するのが好み、最高速度で多くの役人を感染させた。このウイルスに感染した人間は、今度はウイルスの庇護者となり、日々にウイルスがのさばるのを助けるようになる。そののさばりかたは尋常でなく、やくざ社会の構造のようにすべての網の目は風を呼び雨を降らせ、意見の合わない人間を意のままに凌辱する。

であればこそ私は毎回、毎回、極左こそ国と民とに災いをもたらす存在だ！と言ってきた。彼らは改革開放の最大の邪魔者だ！この極左勢力の横行を許し、このウイルスが全社会を感染させるのを放っておけば、改革は必ず失敗し、中国に未来はない。

最後の一篇なので、やはりいくらか感謝の言葉を述べたい。たくさんの読者の支持と激励に感謝する。無数のコメントや文章は、多くの人が私と同じように考えていることを感じさせてくれた。私の背後は空漠々ではなくて、山また山が支えてくれていた。それから二湘さんに感謝したい。私のブログが封鎖された時、彼女は私に最大限の援助を提供してくれた。彼女がいなければ、私の日記は続けられなかった。そのほか『財新』、『今日のトップ』にも感謝したい。彼らは私が文章を発表する場所がなくなった時に、それを提供してくれた。これらの援助はもう一つ別の角度から私の胸に大きな慰めをもたらしてくれた。これらの日々の中で私は孤独を感じたことがなかったのだ。

あの美しい戦いを私は戦いきった。

走るべき道を私は走りきった。

信じた道を私は守りきった。(完)

訳注「市民聯合署名」：市民が連名で署名して、政治的立場や要望事項をしかるべき部門に提出すること。この場合、武漢でも反米の署名運動があったようである。

抄訳者の蛇足：以上で方方女史の『武漢日記』の私が入手した部分は訳し終えた。お読みいただいた方はお分かりのように、この日記のハイライトはコロナ肺炎の蔓延初期における武漢市当局の対応についての方方女史の辛辣な批判であろうと思われるが、訳したのは最終部分なので、彼女の舌鋒の鋭さに直接触れることはできなかった。それでも随所にそれをうかがわせる表現はあるので、そこから全体を推し量っていただきたい。

本書はすでに英国では英訳本が出版され、米国でも刊行が近いと思われる。日本語版が出るのか出ないのか、判然としないが、ともかく習近平礼賛、共産党礼賛一色の中国で、勇気ある作家の気骨ある文章が大きな話題になったことは確かなので、その一部に触れていただけたことで、今回の私の任務は一応完了ということにしたい。ご愛読多謝。